

3代目の 経営戦略と心意気

「会社は3代目が難しい」とよくいわれるが、そんなリンクスを覆す3代目経営者たちがいる。長年の歴史の中で初代、2代目が築いてきたDNAを受け継ぎながら、新たな発想で会社を進化させている神戸の3代目を訪ねた。

「創業者の気持ち」で 会社を再建

株式会社サヌキ

- ① 初代：祖父 尾藤唯夫氏
縫製職人として事業の基礎を築く
- ② 2代目：父 良則氏
仕入れに注力し、卸先を開拓
- ③ 3代目：唯之氏
ネット販売で新たな顧客を開拓

「まったく継ぐつもりはなかった」というサヌキの尾藤唯之社長の運命は、阪神・淡路大震災で大きく変わった。瀕死の状態にあった会社を救うべく、神戸に戻った尾藤社長は「創業者の気持ち」で苦境に立ち向かい、3代目として新たな風を会社に吹き込んでいる。



尾藤唯之社長

「継ぐつもりはなかった」

その決断に選択の余地はなかった。1995年4月。阪神・淡路大震災後の混乱の中で、社長である父親が病に倒れた。思わしくない業績が続く、廃業を決めた矢先の出来事だった。当時、大手鉄鋼メーカーの技術者として大阪で勤務していた尾藤唯之現社長。「両親は幼いころから「お前は口下手だから商売には向いていない」と継がせる気持ちはまったくなく、僕の頭の中にも継ぐつもりは皆目ありませんでした」。だが、2000万円の負債を一掃しないことには、畳むに畳めないという厳しい現実を知ることになる。「僕が戻って、会社を立て直すしか道は残されていませんでした」。開発に携わった半導体製造装置の納入を見届けて、神戸に戻った。

経営に目覚める

自宅は全壊していた。兵庫区にある本社倉庫に2年間寝泊りしながらの再建作業が始まった。親の仕事を手伝ったこともなかった尾藤社長に

としては、まったくのゼロからのスタート。苦手な営業も率先して仕事を覚えていった。だが、1年後の決算は、600万円の赤字だった。「どこかに「なんとかならんやないか」という甘い気持ちがありました。これで目が覚めました」

翌年から“出血”を抑えるため、徹底した経費節減と在庫の見直しに取り組んだ。蛍光灯の本数を減らし、付き合いで出していた広告をやめた。その結果、借金を4年で返し切った。「でもそれは経費を抑えた結果。売り上げの減少は続いていました」

職人肌の初代、礎築く2代目

創業は1936年。縫製工だった祖父の唯夫さんがその腕を生かし、作業服の縫製業を始めた。多くの職人